

# M.O.V.E DJ MITSU THE BEATS feat. Frank Nitt & Guilty Simpson

90年代ジャップホップをテーマに掲げ、DJ MITSU THE BEATSがエグゼクティブ・プロデューサーを務めるレーベル「C.r.e.a.m. Team Records」これに、DJ MITSU THE BEATS自身のプロデュースでShing02やKOHEI JAPANをフィーチャーしたシングルをそれぞれリリースしてきたが、第3弾リリースとなる今回は初の海外ゲストとして共にプロデュースしたFrank Nitt (以下「Frank」)とGuilty Simpson (以下「Guilty」)の二人をゲストに招聘。最強な3人のタッグによる楽曲「M.O.V.E.」が完成した。

ジャップホップ・チネオ、Frank N Dankなどの活動でも知られるFrankや、片やソロアーティストとして活動しているGuiltyだが、彼らは単に同じデトロイト出身というだけでなく、伝説的なプロデューサー「J Dilla」と繋がりが深いという共通項があるのは、コマなジャップホップファンであれば存じださう。彼らと同じデトロイト出身であり、90年代半ばから2000年代にかけて数々のジャップホップトラックを生み出しながら、2006年に32歳で急死したのがJ Dilla。FrankがJ Dillaに初めて出会ったのがFrank自身がまだ12歳の時(注：J DillaはFrank Nittiの11年上)で、Frank N Dankがグループ名の名付け親もJ Dillaだったと云う。

Jay Deeが中心として活動しながら、すでにプロデューサーとしてジャップホップファンの間では知られる存在であった彼が、2001年に自身の名義(＝Jay Dee aka J Dilla)リリースした初のアルバム『Welcome 2 Detroit』の収録曲「Pause」にFrank N Dankがゲスト参加している。ちなみに2003年にリリースされたJ DillaとLAのプロデューサー「Madlib」のコリメンタリーのアルバム『Champion Sound』のメイントラックの1つであった「McNasty Fitch」に、Frank N Dankはフィーチャーされている。

DJ MITSU THE BEATS: Frankを知ったのは、やはりJ Dilla『Welcome 2 Detroit』だと思ってます。ちなみに、Jaylibの「McNasty Fitch」のラップが個人的に好きで、その印象深いですね。ちなみにFrank N Dankの曲は今もまだ一番プレイしたのが「Push」です。12インチシングルがヨーロッパ(ドイツ)リリースで、日本では入手困難だったので個人輸入で手に入れて。J Dillaがプロデュースしているんですけど、このビートにも個人的影響を受けて。今でもプレイし続けています。僕にとって重要な曲です。

Frank N Dank: 面白い、GuiltyやJaylib

『Champion Sound』にフィーチャリングされたおり、参加曲「Strapped」は彼のラッパーとしてのキャリアの中でも最初期の作品の1つだ。その後、GuiltyはJ Dillaが亡くなった以降にリリースされたアルバム『The Shining』や「Ruff Draft」にも参加するなど、デトロイトの注目ラッパーとしてその名を広めていき、2008年にはじめて1stアルバム「Ode To The Ghetto」をStones Throwからリリース。当然、このアルバムにもJ Dillaのプロデュース曲(「I Must Love You」)が収録されている。

DJ MITSU THE BEATS: Guiltyは最初にJ Dilla関連のアーティストを知った。Guiltyのアルバムも格好良かったんですけど、僕が一番好きなGuiltyの曲がM.E.D.と一緒にゲスト参加していたQuakersの「Fitta Happier」(2012年リリースのアルバム『Quakers』収録)で、PVもめちゃくちゃ格好良いんですけど、彼のハードコアなラップがヤラれました。

ちなみにGuiltyはMadlibとのタッグでStones Throwから『OJ Simpson』を2010年にリリースするのだが、このアルバムにはFrankが「Scratch Warning」などの曲でゲスト参加しており、「おまの」へのこの曲が二人の初共演曲と思われる。

敬愛するプロデューサー「J Dilla」からの流れでFrankやGuiltyなどの二人のラッパーを知り、純粋にファンでもあったと云うDJ MITSU THE BEATS。実は今回の共演以前にも彼らとは少なからず関わりがあったと云う。

DJ MITSU THE BEATS: 2000年代後半だと思ってるんだけど、LAへ行った時にGuiltyと曲を作れるという話を聞いて。めちゃくちゃGuiltyのアルバムが出たりして、盛り上がりすぎてたタイミングだったので、僕自身はめちゃやりたかったですけど。でも、僕が全てのインシニアチフを取っていたわけじゃないだったので、その時は表現はしなくて。

一方でFrankに関しては、プロデューサーとしてすでに楽曲での共演を果たしている。

DJ MITSU THE BEATS: 多分、彼らが日本のヒップホップカーとやりたいみたいな話で僕に声がかかったと思っんですけど、それでトラックを提供して出来たのが、2019年にリリースされたFrank N Dankのアルバム『St. Louis』に入っています。『St. Louis (The Block)』です。それがFrankの最初のアルバム。

DJ MITSU THE BEATSが手がけた曲がアルバムタイトル曲になったという事は、それだけ彼らがDJ MITSU THE BEATSのジョーを気に入ったという人の証でもあるのだ。この時に出来た両者のコラボションが、今回のコラボレーションにも繋がっています。

DJ MITSU THE BEATS: インスタとかからFrankやGuiltyが二人と一緒に曲作りをしているのを見て、「Jの二人が今も繋がっているならば、一緒に(曲作りを)出来るかな?」って思った。それでFrankや、それからFrank経由でGuiltyにもお願いすることがあった。

「M.O.V.E.」を一聴して思うのは、この3人がある意味、J Dillaという人物がきっかけで繋がったのにも関わらず、曲の質感はそれとは異なるタイプであるという点だ。

DJ MITSU THE BEATS: 90年代ジャップホップ、このテーマがあるの、逆にJ Dillaの曲を出しちゃったら2000年感が出ちゃうんじゃないか。J Dillaはぼんやりしてる感じがなくて、90年代ヒップホップという縛りがあるのと、逆に自分が出て良かったなと思います。

サンプリングで作られながら、躍動するライヴ感のあるビートはこの曲の大きな魅力だろう。

DJ MITSU THE BEATS: 90年代のテイストを出したいという理由で、ピアノを使ったジャジーなものにしようって考えて。ただ、ジャジーと言っても柔らかい感じではなくて、もっと尖ったテイストのジャズのイメージ。そういうビートが二人のラップとも合ったろうなと思って。ただ、ピアノの跳ね方とかドラムの感じとかもそうですけど、90年代のものではなくて、現在のヒップホップとも融合するものになりました。こういうトラックを最近はおまのやってなかったものがある。逆に90年代に自分が作っていたビートにも通ずるものがあるからね。

1バース目がFrankのバース目をGuiltyがラップして、「M.O.V.E.」というタイトルがキーとなって、二人はフリースタイル的にライム乗せながら、スピーディーかつスリリングに突き進んでいく。

DJ MITSU THE BEATS: 最初、Frankのラップから始まる、その後もバッチリだと思って思ってたね。Guiltyのラップも格好良く仕上がって。

二人のリリックに関しても、良い意味でその場の勢いでラップしている感じが伝わりやすく、そういうところがなんかジャップホップならではのところを感じます。

ちなみにDJ MITSU THE BEATSは、この二人のラップに「デトロイト」の空気を強く感じています。

DJ MITSU THE BEATS: すごく部分が違って、これは説明できないんですけど、この二人からはめちゃくちゃデトロイトを感じますね。それは彼らの曲を昔から何度も聴いていて、僕の中で勝手に刷り込まれているイメージなのかもしれないですけど。昔、一度だけデトロイトに行った時に、あるパーティーでDJをやった。その頃、デトロイトは自動車産業が完全に落ち込んで、街自体が廃墟みたいになっている時で。ビルの何階かでDJをしたんですけど、薄暗い中でお客さんも20人ぐらいしかいなくて。ビルの窓から外を見ても、誰も歩いてない。そんな中で、かかっている曲はめちゃくちゃ格好良い。そこで受けた影響がすごく大きくて、その時の記憶は今も抜けない。それが僕の思うデトロイトのイメージですね。

仙台とデトロイトという二つの街が繋がって生まれた今回の「M.O.V.E.」。彼らが東京やNY、LAといった都市の出身ではないからこそ、そのグルーブがこの曲の中には宿っているようにも思う。また、この曲をきっかけに、DJ MITSU THE BEATSが彼ら二人、あるいはさらに他のアーティストも交えて、国境を超えたコラボレーションが展開していくことを期待したい。

文 大前 至(音楽ライター)

